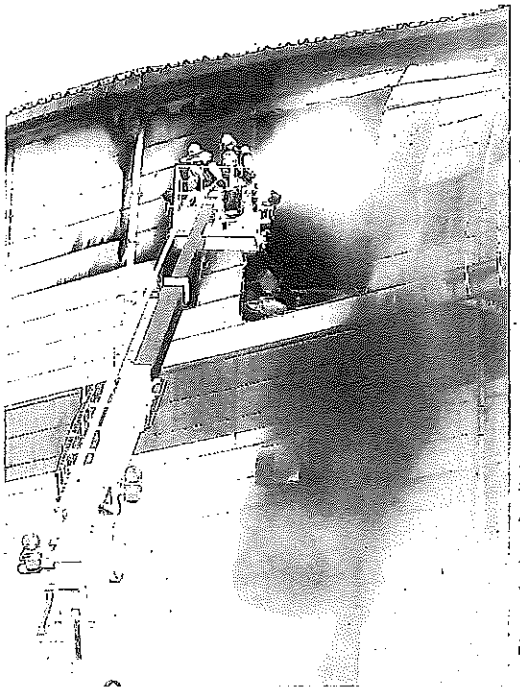
大型物流倉庫に盲点

窓や扉少なく消火難航

アスクル火災 なお鎮火せず

埼玉県三芳町の事務用品通販アスクルの倉庫火災は21日、発生から丸5日がたった。倉庫内の燃焼は収まりつつあるが、鎮火のめどは立っていない。窓や扉など開口部が少ない構造で消火活動が難航し、火災の影響で商品の配送に遅れも出ている。インターネット通販の拡大に対応した物流拠点の大型化が相次ぐなか、今回の火災は防火上の課題を浮き彫りにした。



消火活動が続くアスクルの倉庫（21日、埼玉県三芳町）

「経験したことがない規模で消火が追いつかない」。21日午後、現場で地元消防の担当者は焦りを募らせた。焦げた倉庫の窓からは灰色の煙が上がり続ける。近くで工務店を営む関野昭さん（74）は「臭いがひどく、喉が痛い」。自営業の女性（40）は「窓のサッシや通気孔をテープで塞いでも、煙が部屋に入ってくる」と嘆いた。

地元消防によると、火災は16日午前、倉庫1階の段ボール置き場で発生した。当時、倉庫内には約500人の従業員がおり、2人が煙を吸って病院に搬送された。これまでに鉄骨3階建ての延べ床面積約7万2千平方㍍のうち、約4万5千平方㍍が焼けた。倒壊の恐れがあるとして周辺の3世帯10人が避難している。

消防は17日、重機で外壁に穴を開けて内部に放水を試みたが、倉庫は縦約240㍍、横約100㍍の広さがあり、中央部分に十分に水が届かなかった。その後、スプレー缶に引火したとみられる爆発音が複数回発生し、中にいた消防隊員が屋外に一時退避する場面もあった。

東京理科大の菅原進一教授（建築防災学）は「物流倉庫は広い空間に段ボールなどの燃えやすい素材が積み重なり、商品の品質管理や防犯のため窓が少ない。内部が高温になりやすく消火しにくい」と指摘。「大型倉庫の壁や鉄骨を耐火被覆で覆うなど防火対策を徹底しなければ、同じような火災が繰り返されるかもしれない」と話す。

ネット通販各社は配送のスピード競争で優位に立つため、物流拠点の大型化を進めているが、今回の火災は大型拠点の機能停止の影響が広範囲に及ぶことを示した。

アスクルによると、倉庫は主力サービスの法人向けサイト「アスクル」や消費者向けサイト「ロハコ」の商品約7万種類を東日本地域に配送する中核の物流拠点で、同社では最大規模という。

火災の影響で同社は16日昼に注文受け付けを一時停止。16日夕に再開したが、横浜市など近隣拠点から代替配送をしているため、東日本全域で1～2日ほどの遅れが出ている。

元東京消防庁消防官で防災アナリストの金子富夫氏は「大型倉庫は扱う商材や建物の構造から大規模火災のリスクがつきまとう。物流業者は1つの拠点が使えない場合には他の拠点でフォローする仕組みを整える必要がある」と話している。

（「日本経済新聞」2017年2月22日付）